

博慈会 老研一口伝言

体のしくみ 病気のしくみ

文福吉裕

第49回

リズムと病気(お盆編)

そろそろ夏休みですが、大人にとっての夏休みといえはやはりお盆休みですね。少し先のことではありますが、今回はお盆を通して、臓器移植やドナーカードについて考えてみましょう。

お盆とは、あの世から死者の魂が抜け出し、時空を超えて21世紀の現世にタイムトラベルしてくるのを歓迎する行事です。さて、このような魂には時差ボケはないのでしょうか。逆に、生きている間に魂が抜け出すことはあるのでしょうか――。

◆お花畑の光景

「そこは一面にきれいな花が咲いたお花畑でした」。九死に一生を得た方が語った臨死体験の一節です。このお花畑とは、自分の魂が生体から抜け出し、あの世へ向かう途中に訪れる不思議な美しさに満ちた光景です。

その次には、三途の川下りが待っています。立花隆は彼の著「臨死体験」の中で、これらの一連の現象についてこう言及しています。

「幽体離脱や幻想的な光景は脳が酸素不足に陥った時に生じる脳内化学伝達物質の作用と説明されているが、それだけでは説明がつかないものが多々ある」と述べているのです。彼をして科学的には解説ができない事象が、この世にはまだあるということです。

◆死のタイムラグ

死とは、肉体から意識としての魂が消滅することをさすのであれば、その魂が抜け出す瞬間は心臓が止まる時なのでしょう、それとも脳が機能を停止した時なのでしょう。

この問題は科学が進み、臓器の移植が可能となった現在、重要な意味を投げかけてきました。心臓死と脳死には、タイムラグがあることが分かってきたからです。

◆移植法による死の判定とは

臓器移植において、死の判定は重要な意味を持ってきます。外科テクニックの進歩や、移植した臓器に拒絶反応が生じないようにする有力な免疫抑制剤の開発に伴い、大きな臓器の移植が可能の時代となってきました。腎臓、肝臓、肺そして心臓です。難病で苦しむ患者さんの治療に、臓器の移植で生命が保証されます。

では、提供する側はどうでしょうか。臓器移植を成功させるカギは、いかに臓器の摘出を早く行なうかで決まります。早い方が移植の成績がよく、受け手のレシピエント側にメリットをもたらしてくれるからです。

平成9年10月にスタートした臓器移植法では、脳死と判定された人は「心臓が動いていても死んでいる」と合法的に判断され、ドナーカードによる本人の同意、あるいは家族の同意があれば、脳死の判定に従い、臓器を摘出されることが可能となりました。

脳死とは脳全体の働きが止まった状態で、脳死になると自力では呼吸できません。人工呼吸器などによって、しばらくは心臓を動かし続けることもできますが、やがて心臓も停止してしまいます。

◆死後に生き続ける命

もし、自分は意思を示していなかったのにドナーとなり、臓器を移植に提供したとすれば、お盆に帰ってくる時、ショックを受けるかもしれません。あるいは、知らないうちに患者さんの役に立ててよかった、と思うかもしれません。ドナーカードは、あらかじめ自主的に合意を得るように作られています。お盆の日には、ドナーカードの意味や移植問題を考えてみるのもいかがでしょうか。

ドナーカード

ドナーカードは、臓器提供に対する意思表示のひとつの手段です。正式には「臓器提供意思表示カード」と呼ばれ、各地方自治体の役所窓口、保健所、郵便局、運転免許試験所などに設置されています。コンビニエンスストアに置かれていることもあり、インターネットを通じた申し込みも可能です。

このカードは臓器移植を強要するものではなく、脳死の判定に従い提供したい臓器を選ぶ項目もあれば、臓器移植を拒否する意思表示もできます。カードの他に、自動車運転免許証、健康保険証などに貼る、臓器提供意思表示シールもあります。

●著者プロフィール

福生 吉裕 (ふくお よしひろ)

一般財団法人 博慈会 老人病研究所 所長。

日本医科大学 連携教授。

『未病息災』(源草社) など著書多数。

一般財団法人 博慈会 老人病研究所